

酔いどれ 取材メモ

オレは酒匂徳利。定年間際の新聞記者だ。無類の酒好きから「徳利の徳さん」と呼ばれることが多い。自分の足を信じる古いタイプのブンヤで、出世とは無縁だが、なぜか酒にまつわる事件情報が集まってくる。

この前、年が明けたと思ったらもうゴールデンウィークか。時が経つのが年々速くなっている。そのため、とかく短気になりがちで、古女房に「せつかちになつたわね」と言われる。その気の短さに酔いが加わると危険だ。酒がらみの事件って、そんなところから始まることが多い。今回も自戒の念を込めて、様々な酒事件をレポートしよう。それが愛する酒への恩返しだと信じているから……。

まず、酒に絡む犯罪といえば、これくらいなら大丈夫と軽い気持ちで犯してしまいう「飲酒運転」だ。「近いから平気」「今夜はあまり飲んでない」と頭の中で悪魔が囁く。だが、一歩間違えたと便利なクルマを

凶器にしてしまい、さらに自らの命も失いかねない。先日、警察庁から2016年の「飲酒運転」による事故の現状が発表された。それをみると最近の飲酒運転事情が見えてくる。

「若いドライバーが減り、一方でアルコール離れも進んでいる。だから飲酒運転自体が減少傾向にあるんじゃない」

行きつけのスナックのミキさんが言うように、そこへマスターが口を挟む。

「飲酒より逆走やアクセル踏み間違いなど、高齢者による運転ミスのニュースのほうが多いでしょう」

そう言いながら、いつもの芋焼酎に合うハマボウフウの天ぷらを差し出す。卵黄の酒粕漬といい、なんとも気の利いた肴をさりげなく出してくれるわりには飲酒運転の読みは見事に外れていた。

昨年1年間の飲酒運転による死亡事故は213件。6年ぶりの増加だ。飲酒運転による事故全体のうち、死亡事故に至る割合でみると5・67%。それ以外の事故の0・68%に比して、およそ8倍に跳ね上がった。厳罰法の改正も手伝い、確かに93年をピークに飲酒運転による死亡事故数は減少傾向だったが、それも下げ止まった模様で、警察庁も「死亡事故は減ったが、飲酒運転の危険性は十分に浸透していない」と分析する。

あらためて飲酒運転の罰則規定を掲載しておこう。酒酔い運転（アルコールの影響

により車両等の正常な運転ができない状態）をした場合は、5年以下の懲役又は100万円以下の罰金。車両を提供した者も酒類を提供した者も罪を問われるのは言うまでもない。そんな罰則を踏まえて、17年の飲酒運転の事故を見てみる。

元且早々飛び込んだきたニュースは北の大地、北海道から。40歳の郵便局長が暮れの忘年会で酒を飲み、前走するクルマに激突した。郵便局長は立ってないほどの酩酊状態にあったという。千葉県の県道で女性が発車する乗用車に衝突、女性に軽症を負わせたまま逃走した47歳の会社社員の男は、「酔っていたので記憶が曖昧」と言い訳する。年末の事故だが、また夕方5時過ぎのことである。静岡県の運送会社の経営者が地検に書類送致された理由は、飲酒好きで二日酔いが常態化していた53歳の男に運転手の仕事を依頼、酒気帯び運転でその男が逮捕されたからだ。

飲酒運転以外の酒事件はどうか。まずは乗り物つながりで電車での事件。JR浦和駅に停車中の電車で、寝込んでいたところを起こされ、立腹した41歳の男が駅員に暴行を働き、敢え無く御用。愛知県の77歳の爺さんは、地下鉄駅構内で唾を吐いたことを注意されたことに憤慨、駅員の顔を殴打するが、泥酔で記憶なしと醜い言い訳に終始した。

酔っ払い高齢者はたちが悪いが、酒に溺れる若者も同じ。京都の中京署に逮捕さ

れた大学生は、面識もない歩行中の女性に突然、ひざ蹴りを食らわせ現行犯逮捕された。また、今年には123万人が新成人となり、毎年の風物詩のごとく、各地から酔った新成人による傷害事件の報告が入ったが、いまや驚きさえない。

アルコールが入ると女性に狼藉を働くバカ男が増える。1月16日夜10時過ぎ、JR総武線電車内で52歳の男が女子高生に対して痴漢行為を働いた。「酒に酔っていて自分を抑えられなかった」というが、父娘ほどの年の差がある女性を相手に何を言っているのだろうか。

金庫の50歳の職員は横浜駅のエスカレーターで女性の体を触り逮捕された。国税局の34歳の職員は、駅改札から20代の女性の後をつけ、マンション出入り口で壁に肩を押し付け、頬を舐め、胸を触った疑いで逮捕された。愚か者には厳罰を……。



イラスト：菊峰志麻